

2026年1月21日（水）聖書研究祈祷会 赤井博夫

賛美：新聖歌 21番『輝く日を仰ぐとき』

タイトル「神様のみわざ（作業）」

聖書箇所 創世記1章1節～31節

聖書は『はじめに神が天と地を創造された。』創世記1章1節、で始まっています。そして6日間で『神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。』27節と記されています。そして28節に『生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。』と言われました。

この記事を書いたのはモーセと言われています。

出エジプト記3章14節で『神はモーセに仰せられた。わたしは「わたしはある」という者である。』と自己紹介されています。人間をはじめ万物は何らかの支え合いで存在しています。しかし、神様だけのご自身だけで存在する方です。

神の啓示を受けて書かれたこの**6日間**の出来事、神様の作業（みわざ）について、特に『神様は仰せられた』という言葉を中心に共に学んでいきたいと思います。

ヨハネの福音書1章1節は『初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』で始まっています。

神様はことばで、天と地と、その中に生きるものを造られました。生きるものを「種類によって造られた」とあります。ここが「進化論」者と議論になるところです。

私が学生会の時に「進化論」について、先生と生徒とのちょっとした議論がありました。当時は私は柏原教会・羽曳野分校の生徒でしたが、学生会の教師にT先生やM先生がおられました。私の同級生で優秀な生徒がいました。彼は当時医学生のM先生（のちに精神科医院開業）に「進化論」について質問しました。私は傍らで聞いていました。M先生は「進化論はあくまでも仮説で、アメーバから人間に進化したとしたら、その過程には何か奇蹟が起こったとしか考えられない」と答えておられたのを思い出します。質問した同級生も、後に医者になり、産婦人科医院を開業しています。人間の「心の問題」を取り扱う精神科医の卵と、後に産婦人科医という「人間の誕生」という神秘に携わる生徒とのやりとりを今でも鮮明に覚えています。ちなみに彼の母親はもう召天されましたが、もともと羽曳野教会員で私の母親とも親しくしていました。

理科系の人に限らず、「神が天地を造り、種類ごとに生物を造り、人をつくった」ということは、人間の知恵や経験や思いで理解することはできません。ただ信じるか信じないかということになります。

神様の言葉と「創造、分け、名づけ、確認」の一連の作業（みわざ）ををみていきま

す。

まず2節に『地は**茫漠**として何もなく』とあります。

【**茫漠**】=果てしなく広々としてとりとめのないさま。ぼんやりとはっきりしないさま。

エンドレス=果てしなく続く。終わりが無い。

口語訳 1:2 『地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてを覆っていた』

新改訳 1:2 『闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。』
これは**母鶏が翼で卵を抱く意味の言葉**とされています。ここに**神様の無限の愛**があります。

【第1日】 1:3 「光、あれ。」すると光があった。光と闇。昼と夜。

【第2日】 1:6 「大空よ、水の真ただ中にあれ。水と水とを分けるものとなれ。」
大空の下にある水と大空の上にある水。
大空を天と名づけられた。

【第3日】 1:9 「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」
乾いた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。
1:11 「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」
種のできる草を種類ごとに。種の入った実を結ぶ木を種類ごとに。
□ここまではいわば**分ける作業**です。形のないものを形づけられました。

□これからはその形の中に**満たす作業**です。

【第4日】 1:14 「光る物が天の大空にあれ、昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。」
1:15 「また天の大空で光る物となり、地の上を照らすようになれ。」
大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。
それらを天の大空に置き、地の上を照らせ、また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。

【第5日】 1:20 「水には生き物が群がれ、鳥は地の上、天の大空を飛べ。」
海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。
1:22 神はそれらを祝福して「生めよ。増えよ。海の上に満ちよ。鳥は地の

上に増えよ。」

【第6日】 1：24「地は生き物を種類ごとに、家畜や、這うもの、地の獣を種類ごとに生じよ」

地の獣を種類ごとに、家畜を種類ごとに、地面を這うすべてのものを種類ごとに造られた。

1：26「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

【われわれ】：①御使いたちとの合議②威光を表す複数形③三位一体：父・子・聖霊

1：28「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地に従えよ。海の魚、空の鳥、地の這うすべての生き物を支配せよ。」

1：29「見よ。私は地の全面にある、種のできるすべての草と、種の入った実のあるすべての木を、今あなた方に与える。あなたがたにとってそれは食物となる。」

1：30「また、生きるいのちのある、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を這うすべてのもののために、すべての緑の草を食物として与える。」

1：31 神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。

これが天地創造の一連の流れです。神様の言葉で人間を含めて、ものが造られ、分けられ、名前が付けられ、混沌から秩序づけられ、完全で間違いのないお方が、あえて被造物を改めてご覧になり、「良し」と確認されています。

人間は神様に似せて造られていますが、完全ではありません。それでも神様は自分を含めて「被造物を治めよ」と神様は言われています。

天地創造という壮大なプロジェクトですが、神様の実務（みわざ）は言葉で始まっています。

イエス様も大工の子ですから「家づくり」の実務者でもあられたわけです。

6日間の最後に、環境が整備されて人間は誕生しました。

天や地や光や水や酸素や太陽や月や星や植物や魚や鳥や動物、食べ物が備えられ、『すべての生き物を支配せよ』と、人間の支配権が全被造物に及ぶのは、人間が神のかたちに似せて造られたからです。

ここから神様の物語が始まります。しかし、人間は大きな過ちを犯しますが、水の面を覆っていた神の霊、すなわち「母鶏が卵を守る無限の愛」により修復の道が開けてまいります。この愛を伝えていく者とさせていただきます。